

「極夜の季節」

作：天野豪紀

登場人物

・父

・颯太(そうた)

颯太にスポット。

颯太

身に染みる風が吹き抜ける季節、ジイジは死んだ。

元々、余命が宣告されていて、なのに俺は父に会いたくないを理由にジイジに会いに行くことをためらった。俺は今、それをすごく後悔している。帰省する道中、おかしな話だけど、じいちゃんが死んだっていうのに知らん顔して通りすぎる人たちに俺は微かに切れてしまっていた。

父

おう。颯太

颯太、何も話さない。

父

オメエ、久しぶりに帰ってきたんだから、ただいまぐらい言えよ。俺はお前を挨拶できない子に育てた覚えはないぞ？

颯太

・・・ただいま

父

おかえり

颯太

そうやって、颯爽と去っていく喪服姿の父の背中を見送った。

男手ひとつで俺を育てたあの逞しい背中は何年前より微かに小さくなっていった。ジイジの葬式は順調に進んでいた。順調すぎて怖いくらいに。その日の夜、俺は父に話しかけられた。

父

お、颯太。お前暇ならあそこの公園にでも行かないか？

颯太

どこの？

父

お前が子供の時によく連れてった公園だよ

颯太

・・・うん。まあいいけど

父

よし、じゃあ行くか

舞台上では椅子から立ち上がって周りを歩きながら、

父 あの時はお前こんなに小さかったのにな(と言って膝下を指差す)

颯太 …… そうだね

父 いやいや、突っ込めよお前！それは小さすぎるだろ、って

颯太 でも子供の時だったらそれくらいじゃないかな

父 オメエ、つまんねえ人間だな？理屈っぽいと嫌われるぞ。

俺はお前をそんな人間に育てた覚え……、あるな。

お前には勉強しかさせてこなかったもんな。

父、指差しながら

父 そのこのブランコに座るか。

座り、父、ビールを開けて飲み始める。

父 ほら、お前も飲め

颯太もビールを開けて飲み始める。

父 お、そうだ。どうだ、彼女とは？

颯太 (吹き出しながら) な、なんで知ってるんだよ

父 オメエのチッターをたまに確認してんだよ

颯太 チッターじゃなくてツイッターね

父 ああ、そんなやつ。オメエ、全然帰ってこねえから心配してたんだよ。

電話も寄越さねえしよ。オメエの情報知るのはチッターとかいうやつ

しかねえんだよ

颯太 ごめん

父 なあ、颯太。お前、仕事うまくいってるのか？

颯太 ……

父 その様子じゃあんまりみてえだな。

(深いため息)

颯太。お前に伝えなきゃならんことがあんだ。

颯太 なに？

父 父さんな、会社クビになってしまった
は？

父 会社の経営が厳しいみたいでな。給料多くもらってる社員たちから、
クビを飛ばしているらしい。(少し苦笑いながら)20年、会社に尽くし
てきたのにな、ひどい世の中だよな

颯太 ク、クビって、父さんもういい歳だろう？これからどうすんだよ

父 まあ、なんとか生きて行くさ。ここまで生きてきたんだ。これからも大
丈夫だろ

颯太 大丈夫って……。楽観的すぎんだろ

父 それよりも俺は、お前の方が心配だ。

颯太 お前、今の仕事が本当にやりたいことではないんじゃないのか？

父 余計な心配だな。俺のことはどうでもいいだろ

颯太 いや、良くない。自分のやりたいことを抑えて、適当な進路選んだんな
ら後で絶対後悔するぞ

父 父さんに何がわかるんだよ

颯太 俺にはわかる

父 じゃあ、逆に聞くけどさ。そんな父さんには夢があったのかよ

颯太 あった

父 え？

父 そうか、俺、お前に言ってなかったな。

父、立ち上がり、

父 父さんな、若いころ作家になりたいと思ってたんだ。

父 子供の時に見たSF小説が忘れられなくてなあ。俺も子供に夢を与えら
れるような小説を書きたいって奮起してたんだよ

颯太 そう、だったんだ

父 でもな、思ってたよりも何倍も何十倍も夢への壁は分厚くてな。お前が
母さんの腹ん中に出来た時、俺は小説家を諦めようって決めたんだ。

颯太 父さんの夢を俺は初めて知った。父さんの新しい一面を知った。俺が知
っているこの人はスーツを着て慌ただしく家をでる姿だけだった。

そして俺はある疑問が浮かび父さんを見た。父さんはすぐに察したようにこう言った

父 ああ、でもな、俺が小説家を諦めたのはお前のせいじゃないからな
颯太 本当？

父 ああ、俺の実力が足らなかっただけだ。俺が夏目漱石や芥川龍之介のように才能があったなら俺はきつとお前が生まれる前に一流の小説家になってるさ。俺にはそれが出来なかった。

颯太

父 でもなオメエには「才能がない」それだけの理由で夢を諦めて欲しくないんだ。最後まで全力を尽くしてほしい。お前には可能性がある。

颯太

父 俺は、夢を諦めてちゃんと後悔したよ。お前は、どうなんだ？

颯太 ……。俺は父に言われ、考えた。俺はどうなんだろうか。

父 聡子が死んで、親父が死んだ。それでお前に今のようない顔さながら生きられてしまったらさ、父さん悲しいんだ。お前は”本当にやりたいことを見つけて”笑顔で生きて欲しい。それが父さんの願いだ。

颯太 なんかこの感じ久しぶりだ。胸が、目頭がじわっと熱くなる。

でも、抑えよう。この人の前じゃそれはあまりにもみつももなさすぎる。

少し間を置いて

父 そうだ、おめえ、『極夜』て知ってるか？

颯太 極夜……。知らない

父 ずっと北のほうの国では今の季節、昼間でも日が上らないんだ。毎日暗い世界が広がる。なんか今の俺やお前みたいだな、て思ってしまった。お互いに悪いこと続きで日が昇る気配すらもねえ。

颯太 でも日本は朝になったらちゃんと朝日が昇るよ。

父 あ！まーた屁理屈言ったな。例えの話だよ例えの。

颯太 ああ、ごめん。

父 それでよくオメエ、彼女出来たなあ？

颯太 まあね

父 (少し笑って)父さんな、若い時その極夜ってやつを見に行ったことある

んだ

颯太 え、なんで？

父 失恋

颯太 まじかよ

父 うるせえ。でも失恋してどん底の毎日を送ってた時に極夜の存在を知っていてもたってもいられなくて見に行ったんだ

颯太 どうだった？極夜

父 本当に日が上らなかつた。その時もあったよ。今の俺の人生みたいだなんて。でもな、俺は面白いことに気づいてしまったんだ。よく陽はまた昇るとかいふけれどよ、朝になっても昇らねえ日はあんだなって。そう思うとわりかしどうでもよく感じてしまった

颯太 朝になっても昇らない日か

父 ああ。人生で一度は経験してみるべきだな、ありゃ。良い経験になるぜ・・・待ってても意味ないよな

父 ・・・なんか言ったか？

颯太 いや、何も

父 そか、よし、じゃそろそろ帰るか。お前に仕事クビになったこと話しかっただけだし

父、立ち上がり、どこか行こうとする

颯太 父さん

父 お、どうした？

颯太 俺、今の仕事やめようかなと思う

父 ・・・そうか。

颯太 うん

父 やっぱり、颯太。お前他にやりたいことがあったのか？
んー、やりたいことか。今は特にないな。

でもな俺、実は子供の頃に憧れていたものがあつたんだよ。
でもいつしか「才能がないかも」って諦めてしまった。まあ、そんな本気で目指してもいなかっただけどき

父 なにに憧れていたんだ？

颯太 小学校の時にさ、父さんが仕事でいない時、勝手に父さんの部屋に入って読んだSF小説が未だに忘れられないんだよ

父 オメエ、まさか
颯太 俺たち、さすが親子って感じだな

父、微かに笑い

父 それで良いなら俺は止めないさ。
颯太 ああ。それで、良いんだ。

が、少し父、考え込んでいる。

颯太 やっぱり不安か？父さん
父 いや、不安ではないんだ。ただお前に言おうと思っていたことがある。小説家の先輩としてのアドバイスだ。

颯太 なんだよ、急に
父 お前は、俺がずっと口を酸っぱく勉強しろ勉強しろって、言ってた意味分かるか？

颯太 高学歴のため？
父 違う
颯太 就職のため？

父 まあ、それもあるが……。半分正解で半分間違い、だな。
颯太 ごめん、お手上げ

父 まだまだだな、オメエ。俺は小説家を目指してた時、分かったことがあるんだ。物語を書くときに小説家に一番必要なものってなんだと思う？
颯太 物語を書くとき……。想像力？

父 それもあるが、一番重要なのは知識だ
颯太 ……知識

父 ああ、知識がない人が書いたストーリーはすごく薄っぺらいものになってしまふんだ。だけど、知識のある人が書いたらそのストーリーはとっても重厚なものになる。想像力なんて誰にでもあるさ。でもその想像力に肉付けするのは小説家の頭の中に蓄えられた知識さ。

お前は、俺よりも何倍も学がある。その蓄えられた学できつと俺よりも何倍も面白い人生を自分の手で描くことが出来るよ。ま、それでも俺より面白い小説は書くことできないかもだけどな

颯太 なんだよ、それ。きつと俺も父さんより面白い小説書けるよ

父 いや無理だな

颯太 なんてだよ

〜人少し笑い、

父 だから、オメエの知識は必ず小説を書く時に役にたつき。わかったか？

颯太 うん

父 よし、なら良かった

颯太 父さん

父 ？

颯太 俺さ、父さんのこと、仕事ばっかだし、勉強に口出してくるし面白くないギャグは言うし、ただのうるさい人だと思ってた。実は少し俺、父さんのこと避けてたんだ

父 知ってた。オメエのことだからそんなことだろうなって

颯太 ジイジにも申し訳ない。全然顔を出せなくて・・・

父 葬儀に顔を出したからもういいんじゃないかねえのかな。そしてたまにお墓まいり行ってあげな。それで充分だ

颯太 うん、そうするよ。俺、今日父さんと話せて本当に良かったなと思ってる。父さん、ありがとう

父 なんだよ、急に。ありがとうって、ちよ、は、恥ずかしいな

颯太 (少し笑って)じゃあ帰ろう。もう遅いよ。ごめんな、引き止めて

父 そうだな、帰るか

颯太 (空をそっと見上げて)この町ってこんなに星が綺麗に見えてたんだ。

父 オメエ、知らなかったのか。

颯太 うん、なんか初めてちゃんと見れた気がする。

颯太歩き出す。父、立ち止まり颯太に話しかける。

父 颯太

颯太 ん？なに？

父 お前に良い情報教えてやる。極夜に関する情報だ

颯太 うん

父 極夜ってのはな、日が登らねえ、昼でもずーと暗い世界が広がってるんだけどよ。だけどな、極夜の季節が一年で一番、オーロラが綺麗に見えるんだ。

父さん、あの時みたオーロラ、この世で一番美しいと今でも思っている。なあ、颯太。どうだ？それも、悪くないよな

颯太、力強く頷き、

颯太 ああ

終